巡礼の道 690

藤屋侃士
(下松市幸ケ丘)

ニュージーランドの風に乗って

私はニュージーランドに行ったことはないが、孫娘が半年間語学留学した経験を手紙にして送ってくれたので今回はそれを紹介する。

◇　◇

『ウィンディ・ウェリントン』風の街といわれる場所がある。日本から飛行機で約10時間、ニュージーランドの首都ウェリントンである。天気がコロコロ変わり、天気予報が役に立たないほどである。しかも用心の折りたたみ傘を持っていっても強風で折れてしまうほどである。「観光客はたいてい、旅行に行ったら傘を折って帰るのよ」とホームステイ先のお母さんに言われたことがある。

私は語学留学でウェリントンに、半年ほどホームステイ先に滞在した。包容力のあるお母さん、ちょっとシャイでユーモアのあるお父さん、ウサギとモルモットとチョコレートが好きな小学生の女の子、お人形みたいな生意気な3歳の男の子と過ごした日々は、一人っ子の私にとっては大変刺激的な時間だった。

ウェリントンでの生活は都会にもかかわらず、ゆったりとした時間が流れていた。移民も多く、私が学んだ語学学校にも中国人（どこの国に行っても見かけるが）や、イスラム国の襲撃から逃れたイスラム圏に住んでいた人や欧米諸国の人々に出会った。考え方や主張が日本人の私には考えられないようなことを言うので、何度も考えさせられた。

その中でもたまたま日本人の友人と話しているときに、クレオパトラを彷彿させるような美人のサウジアラビアのお姉さんに言われたことが印象に残っている。

「日本語は小鳥が歌っているように聞こえる」と言われた。なるほどなぁ、日本語がわからない人にはそんな風に聞こえるのか。お姉さん曰く、中国語は怒っているように聞こえると。確かに。しかし、彼女の話していたアラビア語は『ル』にしか聞こえない。さすが世界一語学習得が難しい言語だ。

サウジアラビアのお姉さんは宗教的な習慣でいつもスカーフを頭に巻いていた。毎日服装に合わせていて、おしゃれに抜かりがなかった。スカーフの下の髪の毛がどうなっているのか気になってしまい、尋ねたことがある。

特別に見せてもらったが、金色にヘアカラーしており、ポニーテールだった。「見えないところにもおしゃれに気を遣っているのよ」

昨今、新型コロナウイルスの対策で、ニュージーランドのことも、度々、目に入るようになった。ホームステイ先の家族や語学学校で出会った人たちは、SNSを通じて、元気そうで安心している。また渡航ができるようになれば、ぜひ行きたいものだ。

ウェリントンの風景とケーブルカー

語学学校の生徒たちと